

しゃらく互助倶楽部

おかげさまで創業20年

生活支援だより

Vol. 29

2025年7月

こんにちは、生活支援が充実した神戸の安全・安心の身元保証サービス、しゃらく互助倶楽部です。
しゃらく互助倶楽部で提供したサービスを皆さまにお届けします。将来的な問題に備えて皆様の参考になれば幸いです。

活動記

第20期 総会を開催しました



特定非営利活動法人しゃらくは、第20期の総会を無事開催いたしました。
創業から21年、NPO法人として設立してから20年が経過し、振り返ればあっという間の年月でした。

21年前、私はアパレルメーカーでマーチャンダイザーとして働いていました。当時、「障がいのある方々がファッションを楽しめる社会をつくりたい」という志を抱いていました。しかし、私自身が衣服に強い関心を持っていなかったこともあり、そのビジョンは現実的ではなく、早々に断念することとなりました。それでも、人と関わる福祉の仕事への思いは消えることなく、NPO法人しゃらくを立ち上げるに至りました。

それからの20年間は、まさに波瀾万丈でした。創業メンバー4名で6畳一間の部屋に暮らし、昼はしゃらく、夜は居酒屋でアルバイトという生活を3年間続けました。何度も逃げ出したくなるような思いに駆られましたが、当時はまさか20年も組織が続くとは想像もしていませんでした。

事業の失敗で会社が傾いたこともありましたが、新型コロナウイルスの流行時には、「誰にも気づかれず、しゃらくという存在が社会から消えてしまえばいい」と思うってしまうほど、苦しい時期もありました。もちろん、嬉しいことや喜びもたくさんありました。

そして迎えた第20期の総会では、財務三表も健全な状態で報告することができました。これからも無理な成長を求めるのではなく、目の前のお客様や会員の皆様と真摯に向き合いながら、少しずつ着実に成長していくことを目指してまいります。

また、今後の10年に向けては「事業承継が可能な体制の構築」を目標に掲げています。私自身も現在48歳、10年後には58歳になります。今のような働き方を続けることが難しくなることも予想されるため、若い世代に理念・ビジョン・想い、そして事業をしっかりと継承できる体制づくりに取り組んでいきたいと考えています。



会員総数16名。オンラインも含めて11名の方に参加していただきました。

月	火	水	木	金	土・日
					1
2	3 支援(万博付添)	4	5 支援(お買物代行) 支援(安否確認)	6 支援(受診付添2か所・銀行付添) 支援(主治医面談) 支援(弔い付添)	7・8 支援(告別式受付)
9 支援(介護タクシー受診付添・お食事付添)	10 支援(お買物代行) 支援(外出付添・お食事付添)	11 法事介護タクシー	12 支援(お買物付添)	13 互助契約 意思表示書作成 会員様訪問	14・15
16 支援(外出付添介護タクシー) 会員様訪問	17 支援(外出付添)	18 支援(外出万博付添)	19 支援(お買物代行) 互助相談	20 支援(受診付添3か所) 支援(銀行付添)	21・22
23 支援(介護タクシー受診付添) 支援(受診付添)	24 支援(お買物代行)	25 支援(外出付添) お便り発送	26 支援(外出介護タクシー)	27 旅りハ 支援(受診付添)	28・29・30 支援(外出付添)

楽しみの外出を控える悲しみ

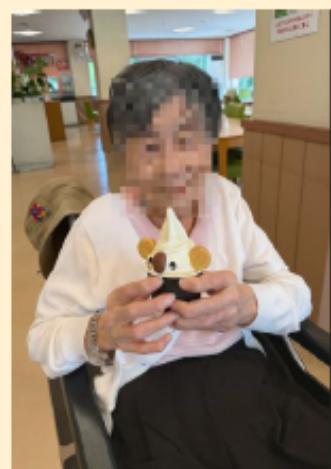
以前、活発な生活を送られていた会員様がいらっしゃいました。| 施設に入居されてからは外出が難しくなり、認知症の進行も見られるようになりました。

医師の助言もあり、約3ヶ月前から週1回の外出支援を開始。淡路島で花を眺めたり、万博記念公園を訪れたり、おいしいものを食べたりと、さまざまな場所へご一緒しました。

次第に笑顔が増え、表情も明るくなっていきました。

ところがある日、施設から「至急皮膚科を受診してほしい」との連絡が入り、診察の結果「疥癬(かいせん)」と判明。感染力が高いため、しばらくは自室での生活となりました。

せっかく笑顔が戻ってきた矢先の出来事。



また心を閉ざしてしまわないかと、私たちは心配しています。

外出は、単なるレクリエーションではなく、心の活力を取り戻す大切な時間。

また笑顔で外の空気を感じられる日が来ることを願いながら、できる支援を続けていきたいと思っています。

「病院の地域連携室からのご相談を受けました」

これまで関わりのなかった大規模な病院の地域連携室より、初めてのご相談をいただきました。

ご相談の内容は、60代半ばの方が脳卒中の疑いで緊急搬送された結果、脳腫瘍と診断され手術を受けられたというものです。術後の後遺症として片麻痺が残り、さらに言語機能にも障がいが生じ、言葉が話すことが難しくなってしまったとのこと。現在は文字盤を使って会話をされているそうです。

今後はリハビリに取り組み、約2ヶ月後には退院予定とのことですが、頼れるご家族がおらず、ご自宅に戻ることも難しい状況です。病院から「しゃらく様でご対応いただけますか？」とのご相談を受け、実際に病院でご本人とお会いさせていただきました。

私自身の性格もあり、どうしても情が入り込んでしまいます。以来、四六時中、リハビリ入院中に必要な支援や、退院後にどのような支援ができるかを考え続けています。

確かに、簡単な支援ではありません。しかし、これから新たに会員様となられる方に対して、安全と安心をしっかりと提供できるよう、誠心誠意取り組んでまいります。

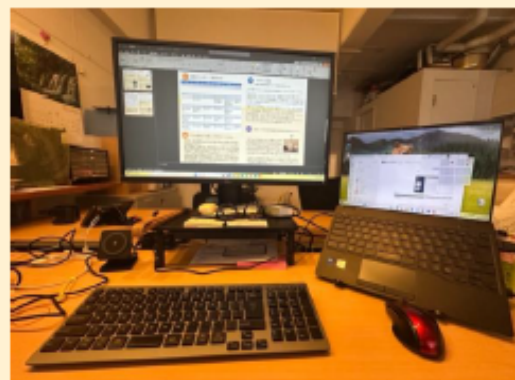
私、小倉の仕事視線

この「しゃらく生活支援だより」を書いている今は、7月5日（土）の午前11時21分。生活支援だよりの執筆はもちろん、会計業務、旅行の企画、ホームページの更新など、すべてこの環境で仕事をしています。

ノートパソコンの小さな画面だけでは効率が悪いですが、モニターを2台使えるこの環境は、なかなか気に入っています。作業がはかどるって、こういうことなんですね。

ただ、問題は椅子です。おそらく15年近く使っているもので、クッションはすっかりへたり、高さ調整も壊れ、リクライニングもできません。私の体重のせいかもしれませんが、座り心地はすこぶる悪い…。

「それなら買い替えればいいじゃない」と思われるかもしれませんが、同じ椅子が6脚もあるため、なかなかの出費になります。



でも、きっと椅子を新しくすれば、私だけでなく、働く仲間たちももっと快適に仕事ができるはず。そう思う今日この頃です。

とはいえ、私はちょっとケチなところがあるので…買い替えはまだ先になりそうです（笑）。

終の棲家V（最終）～場所ではなく、“関係性”～

「終の棲家」という言葉を聞くと、多くの方が“どこで暮らすか”という住まいの場所を思い浮かべるかもしれません。

けれど、私たちが日々支援の現場で感じるのは、住まいの“場所”以上に、“誰と、どんな関係の中で過ごすか”が、人生の終盤において大きな意味を持つのではないかと思います。

今号の「今月のご相談」でご紹介した方は、リハビリ病院を退院された後の生活を想定して支援を検討している方です。

ご自宅に戻っても、身体は思うように動かず、家には誰もいない。手を貸してくれる人も、気にかけてくれる人もいない。

住み慣れた家での生活ではあるものの、自分の存在に関心を持ってくれる人がいない環境は、きつととてもつらいものだと思います。

もちろん、安全や安心は暮らしの基本です。そうした意味では、介護施設という選択肢は非常に重要です。しかし、それ以上に大切なのは、「人と人とのつながり」ではないでしょうか。

誰かが自分を気にかけてくれる。誰かと笑い合える時間がある。

そんな関係性の中にこそ、本当の「終の棲家」があるのだと、私たちは日々の支援を通して感じています。

旅リハ

車両入れ替えをしました。

2015年から10年間にわたり活躍してくれた福祉車両を、このたび入れ替えることとなりました。

走行距離は約15万キロ。長い旅では、神戸から長野県、富山県、岐阜県へと、1回のご旅行で約2,000キロを走破したこともありました。

また、ご自宅から病院までの短い距離を日々走り、お客様の生活の一部として、そして夢や希望を乗せて走ってくれた大切な存在でした。

10年という歳月の中で、少しずつ車体の傷みも目立つようになり、燃費の面でも課題が出てきたため、思い切って新しい車両へと入れ替える決断をいたしました。

これまで本当にありがとう。

あなたが走ってくれた道のりには、たくさんの笑顔と想いが詰まっていました。

そしてこれからは、新しい車両がその想いを引き継ぎ、会員様やお客様の生活の一部として、また夢や希望を乗せて、力強く走ってくれることを願っています。

